

【令和元年度倫理学コース講演会 講演要旨】

キリスト教の世界観

—真の安心安全はどこから来るのか—

阿久戸 義愛

はじめに

今回、「キリスト教の世界観」について講演しようと考えていたところ、ちょうどNHKが首都直下型地震について一週間に亘って集中的に取り上げるという企画を行っていた⁽¹⁾。私も仙台にある大学に勤務しており、東日本大震災の傷跡を多く見てきた。東北は今でも震災の後遺症と向き合っている。東京に暮らす学生諸君にも、大規模災害への備えについて、普段からしっかりと考えていただきたいと思っている。自治体も全力で防災や市民の「安全安心」について取り組んでいる。しかし、大規模災害を前にして、行政の取り組みにはもちろん限界がある。では、我々の本当の安心や安全とは一体どこにあるのだろうか。それについて、キリスト教は何を語っているだろうか。今回は、我々の本当の安全安心、あるいは救いは、どこから来るのか、ということ、キリスト教が世界や人間についてどのように見ているのかを考察することを通じて、考えてみたい。

「天地創造」が描く世界

旧約聖書の『創世記』には、神が天地を七日間で創造したことが記されている。一日目には、かたちなく虚しい世界に光を。二日目には、水を上下に分けて大空を。三日目には、水を集めて乾いた大地と海、また

大地に草木を。四日目には、天に二つの大きな光、すなわち太陽と月、また星々を。五日目には、海の生き物と空を飛ぶ生き物を。六日目には、陸地の生き物と人間を創った。神は御自分が創られた世界が「極めて良い」ことを確認し、そして七日目には、この日を特別な日として休息をとられた、と書いてある。

神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。（創世記1:31⁽²⁾）

第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。（創世記2:2-3）

科学の進歩した現代に生きている我々にとっては、世界がこのようにたった七日間で出来た、などという説明は、荒唐無稽でとても受け入れられないものであろう。しかし、この天地創造の物語から、今日の我々も多くを学ぶことができる。例えば、神が七日間のうち六日間働き、最後の一日にはそれまでの日々を振り返り、そして休んだ、と記されている。我々は一週間を七日間という単位で区切り、そして一日を休日とするが、これは聖書の伝統にも由来することでもある。そして、キリスト教徒は、週の一日、日曜日に教会に行き、神に礼拝を捧げる。一週間を忙しく過ごしているなかで、神を忘れて過ごしてしまうことがしばしばあるが、それでも日曜日は、最も大切なことを思い出す特別な時間として大事にする。我々も、例えばどんなに好きな遊びであっても、月曜日から金曜日まで忙しく働き、土日でも遊びで忙しく過ごしていると、だんだんと、その好きなことでさえ楽しく感じられなくなってしまう、ということがあろう。「忙」という字が、「心が亡くなる」という漢字のつくりをしているように、忙し過ぎると、大事なことを感じ取る心を失ってしまう、ということがあろうのではなかろうか。それゆえ、週に一度、我々にとって本当に大事なことは何なのか、ということ振り返る、

そのような時間が必要なのだ、と言えるのではなかろうか。キリスト教徒は、日曜の礼拝で、その大事なことに心を向ける。神が七日目に、創造のわざを振り返りながら休まれた。被造物たる人間にもそういう時間が必要だ、ということ、この物語は示唆していると言えだろう。

また、天地創造の物語からは、聖書がこの世界をどのように捉えているかということを知ることができる。創世記の冒頭にはこのような言葉がある。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。（創世記1:1-2）

実は、これとよく似た言葉が、聖書の別の箇所、エレミヤ書に書かれている。

わたしは地を見たが、それは形がなく、またむなしかった。天をあおいだが、そこには光がなかった。わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。わたしは見たが、人はひとりもおらず、空の鳥はみな飛び去っていた。（エレミヤ書4:23）

預言者エレミヤの時代、イスラエルの民がバビロニアに征服されて奴隷状態になっていた頃に書かれた記述である。エレミヤの時代、もちろん実際に空に本当に光が無かったのではないし、人や鳥がいなかったのでもない。しかし、人間を支える社会基盤としての「地」が消失している。社会は混乱し、人の心は荒廃し、天に希望の光は見いだせず、世界は揺らいで、生気に満ちたような人がいない。誰も明日に希望を抱けずにいる。何をしても意味を見いだせない。そして、混沌や死や絶望が、大地を覆っている。我々は、例えば巨大な震災に見舞われた直後に実際に経験したような、自分達のこれまでとこれからの努力のすべてが否定されるかのような、そういう闇を経験することがあるが、そのような闇に包まれた世界が、創世記が見ている、そして神が介入しようとしている世界の姿である。そのような世界の暗闇に対して、神は働きかける。

「光あれ！」と。すると、絶望と虚無の闇の中に、光が射してくるのである。そして、七日間のうちに、神は「良い」世界、すべてに意味があり、生きる価値があり、神がそこで生きると用意してくれた人生が待っているような、そういう「生きるに値する世界」を創りだしていくのである。だから、どのような闇の中であっても、あなたは生きなさい！　これが、創世記が描く我々の生きる世界の姿であり、恐らくはエレミヤの時代に書かれたであろう、天地創造の希望のメッセージである。

人間の創造と楽園喪失

さて、創世記の物語は続く。神は人間（アダム）をつくり、楽園エデンに住ませた。また、独りでいた人間に、最良のパートナー（エバ）を与えられる。

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」（創世記2:18）

楽園ではすべての生き物が、互いに傷つけ合うことなく幸せに暮らしている、そのような調和が、しばしば絵画などに描かれている。しかし、その調和が乱されていく。蛇が現れて、人間に対し、禁じられた木の実を食べることを唆す。神はなぜ人間に対して、ある木からだけは取って食ってはならない、というような禁忌を設けたのか、というような質問を、よく受ける。それは、神が人間と「特別な関係」になろうと考えたからだ、と言えよう。我々も、誰かと特別な関係になる、というのは、その人と特別な約束をする、ということではないだろうか。その人がすることならどんな不正でも裏切りでも何でも許してあげる、というのは、却って相手のことを特別に思っていない、自分にとって「どうでもよい」人ということになるのではないだろうか。誰かと特別な関係であるとは、言葉にするにせよしないにせよ互いに何らかの約束を持ち、それを守る、ということかも知れない。神と人との唯一の約束は、禁じられた木から

だけは取って食べない、という容易いはずのものであった。しかし、人間は蛇に唆されて、極めて安易にその木の実を食べてしまう。蛇の唆す声とは、我々の中にある弱さかも知れない。裏切ってもよい、誰かを傷つけてしまっても、自分がよければそれで構わない、という、悪への傾き、すなわち原罪の声かも知れない。その唆す声に、人間は、逡巡する様子もなく、本当にあっけなく屈してしまう。

ところで、人間は成長する中で、大体三歳くらいから、知識をどんどん身につけて賢くなっていくと同時に、親に対して反抗するようになる。例えば、それまでは両親のいいなりになっていた幼児が、ある時突然、母親の呼びかけを無視してみたり、自分自身の姿を気にするようになったりする。それは、人間の自我（エゴ）の目覚めである。親から守られるだけの存在から、自分が独立した存在であることに気づくのだ。その自意識と同時に、羞恥心や名誉心が目覚めてくる。もちろんこの成長はよいことでもある。しかし、もし羞恥心や名誉心が、独善的傾向を示すようならば、その自我（エゴ）は利己主義（エゴイズム）に堕していく。聖書はそれを、万人に共通する罪、原罪とした。

アダムとエバは、「善悪を知る木の実」を食べ、賢くなる。そして、善と同時に悪を行うことも知った。自我が芽生え、裸であることを恥じて、自分を着飾ろうとした。神は彼らを呼び止め、詰問する。

神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」主なる神は女に向かって言われた。「何と何をしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」（創世記3:11-13）

二人は、互いに責任をなすりつけ合い、悔いることなく、最終的に神に対して責任を追及するような、自己弁明に終始する人間の罪の本性をさらけ出す。この罪が、互いに最良のパートナーであった二人を、そして神と人との関係を、バラバラに壊していく。原罪は、アダム以来、神

に背いて罪や欲求のために生きてしまう傾向として、人間が生まれながらにして赤ん坊でさえ持っているものとされる。キリスト教では罪の理解として、行為の結果としての罪（crime）と、倫理的な罪・心の内側の罪惡としての罪（sin）を区別するが、原罪は後者にあたる。罪によって人間達が互いの絆を自らバラバラにしていくことで、樂園の調和が失われ、そこはもはや「樂園」ではなくなっていく。神は人間を罰し、樂園から追放される。

ところで、どうして神は人間が罪を犯さないように、無理矢理従えるということをしなかったのだろうか。神は人間に自由意志を与えた。それは、人間が自らの意志で、神を愛することを選ぶことを神が望んだからだとされる。樂園を失い、樂園ならざる世界を生きていく人間たちも、新たな樂園をこの世界に築いていくことが、人間が歴史の中で神に求められた課題であった。しかし、その後続く人間の歴史は一層の罪の歴史であった。

大洪水とノアの箱舟

旧約聖書が神話的に描く人間の罪の歴史として、今回は特に、大洪水とノアの箱舟、そしてバベルの塔の物語について触れたい。

大洪水とノアの箱舟の物語は、創世記第6～9章に記されてある。大洪水の神話は世界各地に見られるもので、例えば古代メソポタミアのシュメール神話「エヌマ・エリシュ」などにも、神々の意に反した人々が大洪水などによって滅ぼされることが描かれている。創世記では、失樂園の後、人間が地上が増えていくに連れて、悪がはびこったことが記されている。かつて神は「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ」（創世記1:22）という祝福を人間に与えたが、一転、地を滅ぼそうと考えた。しかし、唯一正しいノアの一家だけは救うことにした。ノアは神から告げられた言葉に従い、狂人扱いをされながらも三階建ての巨大な船を造り、そこにすべての生き物の雄と雌を入れた。すると、四十日降り続く雨と百五十日の大洪水が世界を襲う。ようやく洪水が収まり、アララト山に漂着

した箱舟を下りたノアは、何よりも先に、神に感謝の礼拝を捧げる。

ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。」（創世記8:20-21）

何よりも先に神に感謝を捧げるノアの姿を見て、神は、二度と人類を滅ぼすことはしないと約束し、その約束の証として、空に虹がかかったという。

ここで、「正しい人」として、世界の滅亡から救われたノアとは、どのような人物であったのだろうか。ノアは、いわば、常に神や自然といった自分の外から語りかけられる声にしっかりと耳を傾け、そして常に備えをしている人だったと言えよう。神や自然や歴史は人間に様々な警告を伝えているが、ノアのようにその声を聞こうとする人間は決して多くなかった。また、ノアは、大洪水という破局を乗り切った後、まず神に感謝の礼拝を捧げた。ノアが示したように、神に対して恨みや怒りや嘆きを訴えるのではなく、与えられた生命への感謝の心を持ち、すべてに感謝し、命を尊び、希望を持って生きていく、そのような人間が「正しい人」である。そのように希望を持って生きる人々は滅びることはない、という祝福が神から与えられ、天と地を繋ぐ虹のかたちで示された。ノアのような人間を神は祝福し、そのような人間達に新しい世界と新しい時代とを託したのであった。しかし、ノアの子孫達もまた、罪の歴史を重ねていくことになる。

バベルの塔

バベルの塔の物語は創世記第11章に記されている。ノアの子孫達はバ

ビロニアに住みついた。その頃、世界中の人々は同じ言葉を使って話していた。そのままであれば、ここにいる学生諸君は今日、外国語学修で悩むことはなかっただろう。また、当時、人々は土や木で家を建てていたが、レンガやアスファルトで建物をつくる、といった新しい「技術」を手にしていく。そこで、人々は、手にした新しい技術を用いて、天にも届く巨大な塔を建設しようとした。

彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。（創世記11:3-4）

それは、人間が、もはや神に怯えて過ごす必要がないという、大きな力を誇示するような、傲慢で挑戦的な試みであった。例えば英雄や支配者を讃える巨大な像を建てることも、「人間」のわざを実際以上に大きく見せようとする傲慢な振る舞いであろう。まさにそのような、人間が自らを大きく見せるためのモニュメントとしての「バベルの塔」の建設が始まった。それを見て、神は、この人間達の試みを撃つことを決める。彼らが互いに言葉が通じないようにして、建築が上手く行かないようにした。

彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」（創世記11:6-7）

塔の建築をしていた人々は、急にお互いの言葉がわからなくなり、これ以上塔を建築することができなくなり、バラバラになって去って行った、とある。絵画的には、この塔は完成前に無惨に崩れてしまう、とい

うように描かれている。

このように聖書では、世界中の言語がそれぞれ異なるのは、この傲慢な試みによって神がそれを乱したから、というように説明される。もちろん、これもまた現代人にとって、そのようにして言語が異なるようになったというような説明は荒唐無稽なものであろう。しかし、ここで問題となっているのは、人間の「傲慢」、あるいは人間の「自己栄化」である。もし我々が傲り高ぶることによって、例えば教員である私が学生諸君のことを侮って、諸君の言うことなど聞くに値しない、というように考えるとしたら、私にとって学生諸君の言葉は聞こえない、理解できない、もはや言葉が通じない、という状態になる。互いの言葉を理解しない、理解しようとしなない、そのような人間達にとって、もはや天に届く塔を建築するという巨大プロジェクトを遂行することは不可能となる。傲慢によって、人々の言葉は混乱し、互いに通じなくなっていく。人々は混乱（バベル）に陥り、共同作業を止め、バラバラに散っていく。

現代に生きる我々も、優れた科学技術を手にかけています。かつて、原子力発電が人類のエネルギー問題を恒久的に解決する、と神話的に賞賛されたように、技術革新によって、脅かされることのない安心と安全を得ようとする。しかし、まさに原子力発電の問題がそうであるように、技術そのものが私達に恒久的な真の安心安全をもたらしてはくれない。また、単純に「自然に帰る」「自然と共に生きる」ことでよい生活ができる、というような生き方も、大洪水神話に見られるように、あるいは東日本大震災などに学ぶことができるように、自然がしばしば私達に牙を剥くということから、我々に安心安全を与えてくれるものではない。それでは、我々の安心安全、あるいは救いは、どこにあるのであろうか。聖書は、それは私達の生き方そのものにある、と語っている。バベルの塔に描かれるような傲慢や混乱を避け、罪を自覚し、ノアのように他者の声に耳を傾けようとする人々、そのような人々が、新しい楽園を築いていく、そのように人間と世界を描いているのである。

キリスト教の愛

以上、主に旧約聖書の創世記から、キリスト教の人間観・世界観を見てきた。それでは、我々人間の存在について、イエス・キリストは何と言っているかを見ていきたい。

聖書が描く人間の姿の特徴は、端的に、皆孤独である、ということである。楽園を追放されていくアダムとエバがそうであったように、人はいつも、誰かと一緒にいても、孤独を感じている。相手から本当に理解し、理解されることを望み、また永遠に理解し合える他者・同伴者を求め、愛し、愛されたいと願っている。そうした愛の欲求は、「存在したい」という欲求でもある。

愛は、キリスト教において最も大切な概念である。例えば、キリスト教式の結婚式を挙げる時、必ず、次のような聖書の箇所が読まれる。

たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。（コリントの信徒への手紙一13:1-8）

キリスト教の愛とはどのようなものであるかを、使徒パウロが説明したものである。結婚しようとする二人は、このような愛でもって、どのような時であっても、互いを愛し合うことを誓い合う。また、その式に参列する人々は、二人がそのような愛を神と人々の前で誓ったことの証人として、もしその二人がこの先悩むことがあれば、助け励ます証人としての役割を果たすことを誓う。それが、「キリスト教式」の結婚式を

挙げるといふことの意味である。

また、イエスは、どの律法が最も重要であるか問われた際に、以下の様に答えている。

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」（マタイによる福音書22:34-40）

イエスの説くこのような愛は、次のようにまとめられる。我々人間は、まず神によって愛された存在である。この神の愛（アガペー）を受けることで、人間は愛を知る。愛を知った人間は、神を愛することを望むようになるが、神を直接に愛することはできない。そこで、神が愛しているところの隣人を愛するということが神への愛に繋がっていく。それは例えば、私が心から愛する自分の子どもに対して、とても親切にしてくれた学生がいたとしたら、その学生の親切な行いは自分の子どもに対してのものではあるが、それは私自身にしてくれたのと同じことのように感じられることだろう。それと同じように、隣人を愛することは神を愛することに繋がっている。したがって、神への愛と隣人愛とは、同じように重要であり、その二つの掟は一つの愛に繋がっているのである。

では、我々が愛すべき隣人とは誰のことであろうか。イエスは、隣人とは誰かということについて、有名な「よきサマリア人のたとえ」を用いて答えている。

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。（中略）旅をしていたあるサマリア人は、そばに來ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗

せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」（ルカによる福音書10:30-37）

強盗に襲われて瀕死の重傷を負ったユダヤ人の旅人に対し、同胞のユダヤ人の祭司やレビ人は見て見ぬ振りをして去って行ったが、サマリア人はこの旅人に近寄って介抱し、無償で助けた。サマリア人とは、当時ユダヤ教から逸脱したとして、ユダヤ人から厭われていた人々であった。ここで、ユダヤ人の隣人は同胞のユダヤ人である、という考えをイエスは否定している。誰が強盗に襲われた人の隣人となったか、その答えは明らかである。しかしここで重要なのは、誰が私の隣人か、誰に優しくするのがよいか、この相手は私が愛するに相応しい相手か、と問うのではなく、「行って、あなたも同じようにしなさい」、すなわちあなた自身がそのような愛を行うものになりなさい！とイエスが告げていることである。このような愛には、境界線がない。それは、イエスが敵をも愛することを求めていることに表れている。

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者と

なりなさい。」（マタイによる福音書5:43-48）

愛するものは「完全な者」となる。それは、エデンの園ですべての調和の中に、神とともに生きていた人間達の姿である。アダムが罪によって失った樂園は、イエスの説く愛によって再び取り戻されるのである。そのような世界の可能性が、イエスの福音によって告げられる。したがって、人間は互いに愛し合う者となることが求められている。その愛は、次のような言葉で究極的に表現される。

人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。（ルカによる福音書6:31）

この、イエスの黄金律と呼ばれる愛の掟が、他者のために生きるキリスト教の倫理の基本原則であり、イエスが描く真の人間の姿である。

他者のために生きる人間の姿とはどのようなものであろうか。今はちょうどクリスマスの季節だが⁽³⁾、例えば19世紀イギリスの小説家チャールズ・ディケンズが『クリスマス・キャロル』の中で描いた守銭奴スクルージが、クリスマス前夜、クリスマスの幽霊によって、自分に親切にしてくれる人達の存在がいること、そしてこのままではその人達に対して取り返しの付かないことをしてしまうことなどについて気づきを与えられ、それまでの生き方を改め、人生をやり直すチャンスが与えられる。この物語には、新約聖書に出てくる徴税人ザアカイのモチーフを見ることができる。金持ちではあったが孤独だったザアカイは、理由は不明だが自分の街にやってきたイエスに是非とも会おうと試みる。イエスはザアカイに目を留め、その夜ずっとザアカイと話をする。ザアカイは、キリストと出会うことによって気づきを与えられ、愛を知り、自らの人生をやり直すチャンスが与えられる。そのような愛の気づきによって、孤独であったザアカイもスクルージも、人との繋がりを取り戻していく。他者との関係において死んでいた二人は、愛によって、他者との交わりの中に甦っていくのである。

イエス・キリストとは一体どのような人物であっただろう。その人生

は、端的に言えば、社会的に立場の弱い人々に愛をもって寄り添おうとした人生であり、自らの生を神と人とのために使い切った愛の人生であった。そのようにしてキリストによって示された愛は、社会の繋がりが断たれ、バラバラになっていった人と人との繋がりを再びつくりあげていく。そのような愛が、アダムとエバ、人間が失ったあの楽園を、すなわち本来の世界を、取り戻していく。創世記に記される天地創造と失楽園の物語は、キリストの愛によって再び世界が取り戻されていくことによって完成していくのである。このような世界の姿と人間の姿が、キリスト教が描く世界観である。

真の安心安全はどこから来るのか

講演冒頭で、安全安心の話をした。震災のような大きな災害は、ノアが経験した破局に類するものであろう。そうした災害を無くすことはできない。しかし、まさにノアがそうだったように、我々は、常に神や自然や歴史や様々な声に耳を傾けて災害に常に備え、仮に破滅的な出来事を経験したとしてもそれを超えて新しい時代をつくりあげていくことができる。我々の真の安全安心は、そのような破滅を超えていく人と人との繋がりにあると言えよう。我々は、楽園を失っていった人間やバベルの塔を建築しようとした人々の姿に学べるように、他者との繋がりを破壊していく中で、自らを危険と罪と死に追いやっている。そうした危険や死を避け、愛と信頼との関係に生きる、そのような人々は、ノアのように破滅を超えていき、滅びることがない、と聖書は語る。我々の愛の関係の中に、真の楽園が取り戻されていく。そこに、キリスト教は、真の安心安全を見るのである。

日々の備えとともに、この世界と人間の姿について、我々の他者との関係性について、改めて思いを深めていきたい。それこそまさに、我々が倫理を学ぶということの意味にほかならない。

注

- (1) NHK「体感 首都直下地震ウイーク」（2019年12月1～8日放送）
- (2) 本文中の聖書の引用はすべて新共同訳聖書を使用した。
- (3) 本講演は12月14日に行われた。